

## がんの不安を感じている人のために シリーズ②

質問 「がんがどのような原因で生じるか」についていろいろ語られますが、一般にまだはっきりしないことが多いようです。SAT療法ではどのように考えているのでしょうか？  
またどのようにすることで問題を解消すると考えているのでしょうか？

がんの SAT 療法開発者 宗像恒次博士

私たちの身体は 60 兆の細胞で出来ていますが、すべてが自分の遺伝子をもつ細胞で出来ていません。たとえば、母子間では胎盤を介してお互いの細胞を共有していることがわかっています。私たちの体の細胞は母親の細胞と共存しているだけでなく、母親の体にいた母親のきょうだいや、かつて母が妊娠したこどもの細胞（母親に流産の自覚のない胚のレベルで亡くなる係留流産が含まれる）も共存していることが、マイクロキメリズム研究を通じ今日科学的に明らかになってきています。つまり私達は遺伝子活動の違う多様な細胞と共存しているわけです。妊娠した時、母親の好みや行動特性の変化が見られるのは、遺伝子活動の違う細胞と共存し始めたためと考えられます。自分の遺伝子と違う細胞は生物学ではギリシャ神話から名前を頂き、キメラ細胞と呼ばれています。

ところで、キメラ細胞は自分の細胞とは遺伝子が異なる非自己細胞なので、妊娠期といった免疫寛容期は除いて免疫の排除対象となります。特にストレスがかかり、交感神経緊張し、緊張物質ノルアドレナリン分泌が高まり、炎症性サイトカインは放出し始めると、免疫の攻撃対象とされやすくなります。

SAT療法では、成人の場合、10年以上の慢性ストレスを抱えると、キメラ細胞が攻撃されることで、自己免疫疾患のみならず、遺伝子異常としての悪性腫瘍が形成されると考えています。だからがんの発見からさかのぼって10年以上の慢性ストレス源に気づき、それをまず解消することががんの心理治療に求められます。